# 仏教経典――卓越した精神遺産

# ドミニック・トロティニョン

現在、東洋哲学研究所とフランス創価文化協会が、 現在、東洋哲学研究所とフランス創価文化協会が、 現在、東洋哲学研究所とフランス創価文化協会が、 現在、東洋哲学研究所とフランス創価文化協会が、 現在、東洋哲学研究所とフランス創価文化協会が、 と、そして何より驚くべき多産性をもった作品を展示と、 と、そして何より、 しようとの熱意に、私たちは敬意を表さずにはいられ

を得たのです。
を得たのです。
を得たのです。
を得たのです。
とができました。そこで、経典はまったく独自の地位とができました。そこで、経典はまったく独自の地位とができました。そこで、経典はまったく独自の地位とができました。そこで、経典はまったく独自の地位とができました。そこで、経典はまったく独自の地位とができました。そこで、経典はまったく独自の地位とができました。そこで、経典はまったく独自の地位という。

れた信じられないほどの工芸的、芸術的、知的、精神た物質的なものだけでなく、仏教経典によって触発さ本展では、素晴らしい写本や印刷された経典といっ

ます。 あり、 集の発展、 仏教経典は、 での〕壮大な再現によって分かりやすく説明されてい 登録されている遺跡 した。このことは、 れた写本の豊富さと多様さを見ることができるように、 本展で私たちが、 ける仏教 的 った全ての人々の芸術的なイマジネーションも育みま えが広まったということをはるかに超えているのです。 な創作能 さらに、 経典の重要性は、 言語の役割についての考察などの起源でも 力を鑑賞することができます。 膨大な翻訳典籍、文字体系の発明、 印刷法の発展にも寄与し、 仏教が根付いた全地域からもたらさ 一九八七年から世界遺産リストに 「莫高窟」のフレスコ壁画の 単に経典にある精神的な教 経典を授か 世界史に 〔本展 用語 お

# 経典が 物語 であった意味

内容として、 ることができます。 ことです。 展が私たちに勧めるのは、 容器として、 仏教図像の起源になった物語や教えを見 しかし、ここで、経典を見ること 経典や写本を見るとともに、 経典を「見る」という

> は必ずしもたやすいことではなく、 にとっては見えないままかもしれないという側 知識のない見学者 面を指

摘しておきたいと思います。

学的ジャンル」においては、 でしょう……。なぜなら、経典というこの独自 けにあるとは限りません。 本質とは、ブッダの言葉の厳密な意味での情報内容だ 記憶するためにいかなる表現形式がとられてい の本質そのものを伝えているはずです。 みに語られたこと」(sutta/sūkta)であり、 しても、 (buddhavacana) であり、 詩偈の形式あるいは散文的 仏教 の教えの始まり それは、 おそらく、 どのような聴衆に向 な物語形式など、 師ブッダによって「巧 は「ブッダ 逆の場合もある ブッダの教え しかし、 の言 内容を 0) その たと かっ 文

がないことではありませんでした。 て話しかけているのかなど、ブッダが話している状況 が不可欠の情報となるからです。 そしてそれに続く対話の「シナリオ化」 しばしばステレオタイプ化され、 経典が物語であったの ある聴衆との は は 出会 意 味 仏教経典―

多くの場合、

の典型的な様式化が、

### No Image

古ウイグル語訳『法華経』「観世音菩薩普門品」写本 (9世紀の書写)。ウイグル文字。 348×29.2 cm。紙本。巻本。古ウイグル語はウイグル族が使用したトルコ語系言語

ました。

衆に話しかけました。

ブッダの言葉は、そこにい

、る相

その状況の中で、

話した瞬間に効果があり

なく、常に、ある特定の状況で、

一人または数人の聴

を教えるのに適しています。ブッダは、あらゆる時代、らゆる現象は何らかの条件(縁)によって生じる」(縁起)た、シナリオ化は、ブッダの教えの基本の一つである「あ関係のない話を並べた〕逸話的なものではありません。まときに極度に単純化されているとしても――〔本筋とは

あらゆる場所で有効であるような理論を話したのでは

それは、今のベナレス近郊でブッダが初めて説法し であったからというよりも、むしろ、そのときの聴衆が、 というよりも、むしろ、そのときの聴衆が、 というよりも、むしろ、そのときの聴衆が、 であったからというよりも、むしろ、そのときの聴衆が、 というよりも、むしろ、そのときの聴衆が、 というよりも、むしろ、そのときの聴衆が、

0) ち真実をあるがままに見るヴィジ 効力であり、 これが、 直ちに結果が出るという特 明らかにされた「ブッ 彐 ン を ダ の言 知 つ

際に身を置くように導かれます。 なのです。 手法なのではなく、 をより快適に楽々と発見することを目的とした文学的 したがって、 聴衆は、 登場人物になりきり、 経典の物 なるべく登場人物と同 教えそれ自体の本質的な構成要素 語的 な側面とは、 その人物の立場に 仏 じ体験が 教 の教え 実 で

> 西暦 すが

ら

また、 がら暗唱できるように、その言葉を暗記します。こう もある説法者の役目です。 れたブッダの 自分が伝える番になったとき、どのような聴衆に、ど うな各状況での教えを記憶することに専念した「説法 のような状況において、教えを伝えるかを指示します。 「説法者」(bhāṇaka)について述べましょう。この は、 弟子の進歩に応じて、ふさわしい「巧みに語ら ただ教えを保持するだけではなく、さらに、 言葉」を選ぶことも、 弟子は、 宗教的修行をしな 師であり教育者で ょ

> きるようになるのです。 弟子もまた、 物語が語る内面的な変革を体験で

あり、 た文字を大いに活用したことに疑いの余地は を広めるために、仏教徒が頻繁に使うようになってい づけられています。もちろん、 用することを強く勧めたマハーヤーナ(Mahāyāna)とい うほとんど言及されることがありません。 大乗のテキストとは、 う思潮は、殊に、「経典」の独特な使用法によって特徴 つかが基本的には「文学として」 ん。しかしながら、往々にして巨大なスケールをもつ このような経典の この側面こそが、 0 すなわち「物語」であったということが忘れ 初め頃、 発展した経緯を説明できるかもしれません。 仏道を歩んでいくために「大乗」を採 「効能的」 数世紀の間、 なによりもまず 大乗がその独自 側 面につい これらの教えの幾 定説とは反対で 経 しかしなが ては、 ありませ 「の教え

仏教の創始者

にも、その「巨大な」あるいは

「無限の」

スケール

れています。

すなわち、

それらの

物

語

0

並

郊

た展開

しかるべき役割があったはずなのです。

効性を求めたのですから であるブッダと同じく、仏教徒は常に何にもまして実

葉によって、

聴衆は回心し、

悟りに至ることさえでき

うか? 次元へと近づいていけるのではないでしょうか? られることによって、私たちは、実相のもう一つ別 語を聞くこと」と物語の「並外れた」性質それ自体が、 にされているようには見えません。ということは、「物 数々の譬喩……。 その良き例です。 聴衆が誘われている新たな体験なのではないのでしょ のけた外れの大結集についての記述、驚くべき物語と る」ということが、絶えず言われつづけます。 知られていなかった教えが、聴衆に対し明らかにされ 本展で中心的立場を正当にも占めている法華経は、 これまでまったく聞いたこともない物語が語 法華経二十八品を通して、「これまで しかし、本当に新しい教えが明らか 諸菩薩 0

すだけで十分です。

それ自体、

一つの

# 経典は 「ブッダ」その人を体現

まずなにより話し聞かせるための言葉であり、 という形式が最終的に採用されたにしても、「経」は、 ッダの教えを保持し、 また広めるために、「書く」 その言

> 訂された際、文字で書かれた文章が口伝の内容によっ ラングーンで一九五六年にパーリ語聖典が最新版に改 て改訂され、その逆ではなかったということを思い出 おいて常に重要です。それを納得するには、 るのです。 口伝の優位性は、 仏教の教え自体 ビルマ の伝播に

たわけです。 とは、矛盾しているように思えるかもしれません。 や教えに、経典という物質化の形を最終的に与えたこ スリランカのシンハラ人たちは、 この「教えを伝持したい」との思いから、 書きとめることによって教えの保持と宣布が容易にな として、いとも安易に、 宗教実践です。したがって、仏教徒たちが彼らの物語 るのは当然であるように思うのです。そして、 てしまいます。ですから、言い伝えられてきた教えを たちは「言葉は消えてしまうが、書いたものは残る」 経」を語り、聞くということは、 書かれたもののほうを重視し 書き残すことを始め 西暦の初め頃 まさに

見る」と言わなかったでしょうか?!

の古い伝統においては、

教えが書かれたものの集成は、

しかも、 法

インド

けです。ブッダ自身が

「私を見る者は、

(Dharma)

必然的に、その物質的な形〔経典〕にも備わっているわ

れるという〕この事実について彼らが不平を書き残して 13 ンドまで危険な旅をしたわけですが、「口伝の優位が見ら 化にとっては大変貴重な「書物」を持ち帰るためにイ ではなかったのです。 るのがその証拠です。 とはいえ、その千年後でさえ、 が  $\Box$ 承」から「書き残す」ことに転向したわ 中国人の巡礼者たちは、 全ての仏教コミュニ 中国文

自

じ特別なやり方で果たすのです。この方法において、 ては、 様のことを、今度はブッダが聴衆に語った言葉が、 ブッダその人を見るだけで聴衆が深く感動したのと同 接近しているからこそ追求できる目的です。すなわち、 的にも応えることになりました。それは、 「ブッダの言葉」に備わっている特別な力は、 教えを形あるものとして具象化することは、 しばしば「聞かせること」と「見せること」が 仏教にお ほとんど 他 の 同 É

るほかなくなったのです。

とって、ブッダの教えを収めた経典は、 置を占めるようになります。そこで、全ての仏教徒に ました。同様に、写本や印刷された経典は、 なく、実際の効果をあげるものにするのです。 もつ、変容させる力、を目に見えるようにするだけで して、「書物」としての「経」は、「ブッダの言葉. 触れたり見たりできる形が与えられます。このように ミとして捨てられなくなり、 が荼毘にふされた後、その体から「仏舎利」が遺され ブッダの 体、 (仏塔)や仏像といった聖なる容器の中の仏舎利の 初 めは耳に聞こえる言葉として現れ、その後、 「法身」(dharmakāya)であるとみなされ、 茶 
足にふすごとく 
焼納す あり スト ふれたゴ ブッ . ウ 位

うだけでなく、それ自体が「ブッダ」と「ブッダの言葉 仏教の聖典とは、 ける聖なる書物への崇拝とはまったく似ていません。 ダヤ教・キリスト教・イスラームという〕||啓典宗教」 を体現しているものなのです。 したがって、仏教経典を崇拝対象にすることは、 単に仏教の教えを保存するものとい にお 

> 仏教経典--卓越した精神遺産

それ自体が、「功徳 (puṇya)」をもたらす「称賛に値する」のを増やすことは、個人的にも、また全人類にとっても、的とはしていません。 仏弟子にとって、このようなもた増大は、教えの内容を確実に宣布することだけを目

大しました。テキストを含む全ての崇拝対象のこうし

図像としてのブッダのイメージも無限に増

同様に、

## No Image

西夏語訳『法華経』の木版折本(11世紀の開版)。西夏文字。 26.5×10.5㎝。紙本。ロシア・東洋古文書研究所所蔵。西夏 語は11-13世紀に中国北西部にあった西夏国(正式国号は 大夏)で使用された言語

ます――なども、「ブッダの言葉」の無数にある物質化ます――なども、「ブッダの言葉」とみなされている他の全てのテキストについても同様です。例えば、石に描かれたり刻まれたマントラ(真言)、ヒマラヤの峠や記念建造物で旅人たマントラ(真言)、ヒマラヤの峠や記念建造物で旅人が目にする数多くの「風馬旗」――祈祷旗とも呼ばれたマントラ(真言)、とみなされています……。それは、お目にする数多くの「風馬旗」――祈祷旗とも呼ばれたマントラ(真言)の無数にある物質化ます――なども、「ブッダの言葉」の無数にある物質化

の形なのです。

経典を印刷する、 棚を有していることでしょうか。たとえまったく読ま 僧院が、手書き写本や経典で埋め尽くされた巨大な本 庫 しての経を広めるために何らかの役割を果たすことに め 体が目的となっていきました。例えば、写本を書写し、 れることがないにしても……。ついには、このような 「ブッダの言葉」を物質的に増やして功徳を得ること自 の宗教」と呼べるでしょう! 0 費用を提供すること。これらは、 神教を「啓典の宗教」と呼ぶならば、 あるいは、 より簡単にその実現のた どれほど多くの 物質的な存在と 仏教は 仏教 書

経

典

行為なのです。そのうえ、多くの大乗経典では、

事してきたのかが明快に説明されます。木版や印刷などテキストの複製法の発展にも熱心に従なります。このことによって、なぜ仏教徒が、当初から、

# 日常を超えた「もう一つの」次元を体験

聖なる石窟においては特に目を引くものであり、 力を失ってはいないようです。 像で表現したい」という興趣を正当化できるのは、 も表すという、もう一つの「物質化の形」に至ったの んその一つです を訪れた人をして、 や「絵になる」場面も、 意思〕だけなのですが、そうは言うものの、単なる挿話 キストに含まれる精神的メッセージ〔を伝えようという も自然なことでした。言うまでもなく、こうした「図 の様々な前世を語る「本生譚」(ジャータカ)も、 登場人物や出来事を言葉だけでなく図像によって 経典その他の多くの仏教の教え あらゆる点で日常的な現実を突き -がもつ物語体という卓越した性質 図像にしたい気を起こさせる 仏教の図像の豊かさは ――ブッダ もちろ そこ テ

重要なのです。それは、図像化された教えをその場で現実の中に信仰者を入り込ませることが、それ以上にを与えることだけが問題なのではなく、「もう一つ」のここでは、精神的体験に図像化された信仰の枠組み

礼、イニシエーションのようなものです。聞いたかのような精神的体験を生み出すため

の入門儀

現象と同じく すことで、大乗仏教が大変に重視する教えの核心を目 させるだけではなく、ブッダがその身を様々な形で示 傷者たちの大半を黙らせたという「奇跡」を思い ラヴァスティ Srāvastī) 仏化現」のような描写は、特に重要な意味をもってい(4) 化する」実例があります。その表現形式は無限です。「千 させます! ここにもまた、「ブッダとその言葉を可視 に見えるものにするのです。すなわち、 る一例です。つまり、これは歴史上のブッダが舎衛城(ス 実際、仏教の聖地はどこでも、独特のめまいを起こ いな、 の街で、彼が討論したばかりの中 それ以上に ブッダは他 実体をもたな 起こ <u>つ</u>

きれない多様な姿で自らを示せるのだというわ

い「空」なる存在であるゆえに、

ありとあらゆる数え

抜けた次元にまで入り込ませます。

期待して作品の数を誇るような月並みの儀礼主義では ありません。うそいつわりのない心からの精神性が働 ŀ 積む」ことについてよく言われることですが) 食料品屋がス をすることだけを重視し執着するあまり、単なる本で 洋人はまた、ブッダの教えの内容に知的なアプローチ す。ここでの豊かさや多様性を生んだものは、(「徳行を 面や実体験と真にかかわる側面を忘れる恐れがありま あろうと、仏教的な「もの」に備わっている物質的側 まったく同じか、ほとんど何も変わらないように見え 繰り返されるブッダの変容の大群に直面し、それらが 注意してもしすぎることはないでしょう。「いつまでも いた結果なのです。 ックを貯蓄するように、後で利益にあずかることを したがって、 理解しがたいと思うようになるでしょう」と。西 西洋人見学者たちに対しては、 いくら

聞こえるもの、触れられるもの、容易に「向き合える」

仏弟子たちは、ブッダとブッダの言葉を、見えるもの、

ものにすることによって、

日常の環境それ自体が急激

あり、経典の存在そのものが、 人々にとっては単なる物体以上のものとなり得るので そこにとどまらず、「ひとつの経典というものが、ある 味さえ引くであろうことは間違いありません。しかし、 典が、歴史的、文化的、 なるように行動します。ここに展示されている仏教経 であった「もう一つの」現実を直接体験できる状況に 経典内容と同等の価値をもっている」ことを、 芸術的関心を呼び、工芸的興 知的理解の対象である 訪れる

内は邦訳に際しての補注

人々に分からせてくれるでしょう。

未知

に変化し、今まで聞いたことも見たこともなく、

教彫刻の主題となった。

ダが座していたという奇跡であり、

多くの仏画や仏どの蓮華にもブ

# 訴注

- (1) 紀元前一世紀、スリランカで大飢饉が続き、僧も次々(1) 紀元前一世紀、スリランカで大飢饉が続き、強団もの伝承者とともに仏教そのものも亡びてしまうと餓死し、教団も滅亡の瀬戸際に立った。このままでがある。こうして、シンハラ文字によるパーリ語仏典がある。こうして、シンハラ文字によるパーリ語仏典が生まれたとされる。
- 第十四巻、一九〇頁)など。 ンユッタ・ニカーヤ=相応部経典22:87。『南伝大蔵経』2)「法を見る者は我を見る。我を見る者は法を見る」(サ
- $\widehat{4}$ 3 舎衛城 視のなか、様々な神変を現した。その一つが「千仏化 ちから神通力を示すよう求められたブッダは、 まるようにとの祈りが込められている。 駆ける馬のように、早く願いがかない、 仰から生まれた、伝統的な五色(五大を表す) 「風馬旗」(ルンタ、タルチョ)は、 の中央に、馬の絵が描かれているもの。 (大国コーサラ国の首都) で、 チベットの民間 異教の指導者た また仏教が広 風のように、 の祈祷

いる。 と東南アジアのテーラワーダ仏教の統合と考察、 d'Etudes Bouddhiques) les religions)』誌には、 009年) は終わりのことなのか?(La mort est-elle une fin ?)』(2 フランスにおける仏教の確立に努める。共著に『死と Theravāda «Vivekārāma»)名誉会長。インドの古代仏教 Dominique Trotignon ヴィヴェーカーラーマ」(Association Bouddhique (の創造」(2004年) があり、 『宗教は発言する / パ リ 「女性と宗教」(2002年)、 所長、 のテーマの際に寄稿して テーラワーダ仏教協会 の仏教学研究所 (Ce qu'en disent (Institut 世

仏教経典――卓越した精神遺産